

愛する男との婚姻をかけた悪徳貴族との取引——それはその貴族との望まぬ疑似新婚生活を1か月続けることだった。その間、テレシアはその醜く肥え太った貴族ヲタッキーに、散々好き放題に体を貪られていた。

そんな爛れた生活が1か月も続けば、テレシアの体も歪な性癖を植え付けられながら、すっかり雌の悦びを刻み込まれてしまった。しかし、それでも尚、まだぎりぎりのところでテレシアは想いを寄せているヴィルヘルムへの想いを繋ぎ、理性を保っていた。

そして遂に最終日が訪れる。この日さえ乗り越えられれば、晴れてテレシアはヲタッキーの下から解放されてヴィルヘルムと一緒にになれるのだ。

「さあ、テレシアたん♡ 今日はいよいよ最終日♪ 悔いが残らないよう、えっぐい変態プレイでおもい〜〜つきり楽しんじゃおうよお」

そんな極めて不快で気持ち悪いヲタッキーの言葉から始まった、テレシアとヲタッキーの最後の夜。

「どうして、こんな恰好を……」

ヲタッキーは当然のように丸裸だった。股間には、それだけが取りえだと言わんばかりの肉棒が反り返って、自らの腹に当たっている。対するテレシアの格好はウェディングドレス姿だった。肩から鎖骨を露出した大胆なデザインで、頭には花が好きな彼女らしく花をあしらった冠が飾られている。

「いやあ、そういえばそもそも結婚式していないよねえって思ってえ♪ ウェディングドレス着てラブラブ気分でドスケベしたら、きっとチョー気持ちよくなれると思うよお♡ 最終日の本気交尾に相応しくね？」

「い、嫌です。私はこんなの……」

「ぐふふ。そんなこと言いながら、ちゃ〜んと自分でドレス着て来てくれるだから♪ テレシアたん、まじ天使♡ 可愛い、可愛い♡ マジ可愛い♡ あ〜ん、チョーラブっ♡」

「や、止めて下さいっ！ 私は貴方のことなんか……」

気持ち悪い言葉でベタ褒めをしてくるヲタッキー。嫌なはずなのに、褒められれば褒められるほど嬉しくなって、胸が踊って口角が上がってくる。しかしそれではいけないと、テレシアは首を振って表情を引き締めなおす。

「今日で……最後ですから……」

「ぐふふふ、分かてるってばあ。ま、テレシアたんが終わりにしたいって言ったらの場

合だけどねえ」

「こんな生活を続けたいなんて、思うはずがありません」

「デュフフ、どうだろうねえ。この間はもう少しでオホ声出そうになってたけど、今日はぜってーアへらすから♪ アへらせて、「んほおおお♡」って白目剥かせてやるっ♡ それじゃ、最初は今まででテレシアたんがサイコーに興奮したご奉仕からお願いしようかなあ♪」

「……」

ヲタッキーがじゅるりと舌なめずりをして、テレシアを舐るように見つめてくる。するとテレシアは諦めたように瞳を閉じてため息を吐くと、そのままそっと背を向けてヲタッキーに密着し、硬くなっている肉棒に、ドレスのスカート越しに臀部を押し付ける。

「んっ……んんっ……」

そして肉棒を尻肉に押し当てるようにしながら腰を動かして擦り付けるようにするテレシアの顔は赤く染まっていた。

「おほほお♪ これが一番興奮したご奉仕なんだ♡ テレシアたんってば、やっぱドスケベだなあ♡ ねえねえ、これ何て言うご奉仕なんだっけ？ 覚えてるう？」

ドレスに生地越しにテレシアの柔らかな尻肉の感触を肉棒で味わい、ヲタッキーもテレシアの卑猥な腰の動きに合わせて動き始めて、肉棒を擦り付ける。

「んっ……ふあっ……」

「ねえ、言ってえテレシアた～ん♡ テレシアたんのドスケベボイス、聞きたいよお♡」

初めは嫌そうにぎこちなさそうだったテレシアの腰の動きが、やがて積極的な動きで円を描くようにしながら尻肉で肉棒の硬さを感じる。そして腰の位置を調整しながら、尻の谷間で肉棒を挟むようにしながら、擦り続ける。

「し、尻コキ……です……っ」

「んっほおおお♪ ノリノリで叫ぶのもエロ過ぎていいけど、恥ずかしそうにエロワード言うテレシアたん、マジドスケベ♡ スケベっ、スケベっ、スケベっ♡ このヤリマン♪」

「あっ……んあっ……あんっ」

気持ち悪い言葉を連呼しながら、ヲタッキーはテレシアの尻の谷間に肉棒をずりゆずり

ゅと擦り付けていくと、テレシアはびくびくと身をくねらせる。

「あゝ~~~~♡ マジでテレシアたん、スケベになってるっ♡ たまんねっ♡ ぜってー、今日で完堕ちさせてやるからなっ♪ ほら、そろそろ次のご奉仕しなよ。愛する夫への熱烈ご奉仕、期待しちゃうよお」

「うっ、ううう……」

卑猥で下品な言葉を浴びせかけられながら、びくびくと嬉しそうに打ち震える肉棒を尻の谷間で感じるテレシア。嫌そうな声を漏らしながらも、頭は興奮の熱を帯び、下腹部の疼きがきゅんと増大していく。

テレシアはヲタッキーに促されるまま次の奉仕へ移るべく、1度身体を離すと、今度はヲタッキーの方へ向かえりながら、そのまましゃがむ。大胆に股を開いて、いわゆる蹲踞のような姿勢になりながら、反り返っている肉棒へ舌を伸ばしていく。

「ほら、何をしてくれるのお？ エロトークでもっと興奮しようよお♪」

「あ、あああ……」

ヲタッキーの言葉が頭を揺らしてくるようで、テレシアは頭の中がグルグルと周り、思考が混濁していく。鼻先にある肉棒から濃い雄のにおいが鼻孔を刺激し、理性が痺れていく。

テレシアは両手を伸ばし、ヲタッキーの両手を指を絡めるように握り合う。

「ラ、ラブラブノーハンドフェラをします……あむ……んっ……」

「おほおおおっ♡ やっべえ♪ ウェディングドレスで下品ガニ股恋人繋ぎノーハンドフェラっ♡ すっげ、すっげ、すっげえ♡ テレシアたん、これも好きなんだ♪」

「あむ……んちゅ……くちゅ……は、はい……ちゅる……れろ……尻コキの次に興奮します……ちゅば……ちゅうっ」

肉棒を口に頬張り顔を前後させながら、時折竿全体へ舌を這わせるようにして、テレシアは積極的に奉仕を続けていく。匂いに加えて味がテレシアの口内に充満し、脳へと強烈な雄の刺激と雌の幸福を届けてくる。

(あ、頭がおかしくなっちゃう……嫌なはずなのにっ……止まらないっ)

雄の味と匂いが、テレシアの快楽中枢を侵していき、どんどん理性を麻痺させていく。

「んぢゅっ……ぢゆるるるっ……ぢゅぼっ……ぢゅぼっ……い、いつもより味も量も……すごいっ……♡」

いつの間にか下品に吸い立てる音と共に、テレシアの口からは唾液と先走りが溢れ出てくる。そして唇を窄めながら頬を凹ませて、テレシアはひよっこような下品な顔をしながら、激しく顔を振ってヲタッキーの肉棒へ熱烈奉仕をしていた。

「うほほほお……♡ げっひんなひよっこフェラ、すっげー♪ 気持ちいい、気持ちいい♡ テレシアたん、しゅきだよお♡ だいしゅきい♡」

「んぢゅうう……ぢゅぼっ……んぢゅっ……わ、私も……ぢゆるるるっ♡」

ヲタッキーに愛を囁かれるとテレシアも嬉しくなってしまう、握り合っている手に力を込める。するとヲタッキーも強く握り返してきて、テレシアは愛を込めながらヲタッキーの肉棒を丹念に舐り、吸い、頬張って味わい尽くす。

「ふうふううう〜……♡ テレシアたんの愛、チンポを通してめっちゃ伝わったよお♪ マジ気持ちよかったあ♡ はあ、ラブラブう♡ チョー幸せえ」

「んっ……ぷは……あ、あああ……」

テレシアのフェラを堪能したヲタッキーは、握り合っていた手を離して、彼女を迎えるように両手を広げる。肉棒から糸を伸ばして口を離れたテレシアはフラフラと立ち上がると、ぶよぶよとしたヲタッキーの肥満体に抱き着くようにして、背中に腕を回す。

そして顔を上げて、舌を伸ばしながらヲタッキーへと顔を近づけていく。

「はあ、はあ……あ、あなたあ……♡」

「ガチラブ奉仕でエロスイッチ入った顔してるテレシアたん、エロ可愛い♪ なに、その顔？ あんなにキスは嫌だって言ったのに、ボクと濃厚トロトロペロチューしたいの？ すっげー気持ち良くて幸せになってマンコからスケベ汁止まらなくなるドスケベチュチュしたいのお？」

「うっ、あっ……あっ……」

テレシアが顔を近づけてくると、ヲタッキーは焦らすように顔を引く。そして卑猥な言葉をとことん浴びせかけてテレシアの妄想を煽り立てると、テレシアは切ない表情で舌を伸ばしたままのだらしない表情を見せる。

「いいのお？ ガチ恋スイッチ入っちゃうよお？ ボクとラブラブペロチューしたら、何もかもどうでも良くなって、マンコ気持ちよくなることしか考えられなくなるよお？ い

いの、いいの？」

「ううう……うっ……」

届かないところで唾液が滴る舌を動かし誘惑してくるヲタッキーに、テレシアは耐えるような物欲しそうな表情で、悔しそうな声を漏らす。

「せっかくの最後の夜だし、楽しむのもいいかもねえ。どうせ今夜が終わればボクとの関係は終わり。難しいことはな～んも考えずに、気持ちいいセックス楽しんじゃおっか♪」

「わ、私は……っっ♡」

テレシアが明確な返事をする前に、ヲタッキーが不意に顔を前に出して舌同士を触れ合わせる。その感触に、テレシアは目を大きく剥きながら全身をビクンと震わせて

「た、楽しみたいっ……最後の夜だから……これでもう最後だから、最高に気持ちいいセックス楽しみたいですっ♡ れろ……ぶちゅ……れろれろ……ぶちゅううっ♡」

舌同士が触れ合うと、テレシアは両手でヲタッキーの顔を左右から挟んで、血走ったような目をしながら夢中で舌を唾液をむさぼり始める。

「んふううう♡ 入ったあ、エロスイッチ♪ んぢゅ……れろ……おおっ、舌フェラやっべえ……テレシアたんの舌もちょうだいい♡」

「んれえええ……んっ……んっ……っああ……し、舌溶けそうっ……ああ、あなたのも下さい……れろ……んぢゅ……」

「あああ……好き、好き、好きっ♡ テレシアたん、どんな気分？ んれろおおお♡ 言って♪ 口にしてっ♪」

「はあああ……ほ、惚れそうっ……ちゅばっ……ちゅば……惚れそうっ♡ れろれろ……あなたのキスに惚れそうっ……♡」

「もっと恋人っぽく、名前と呼んでよお♪」

「あ、あなたの……ヲタッキー様のペロチューに惚れそうですっ♡」

「違う違う違う！ 恋人同士なんだから、呼び捨てでいいよ。テレシアっ♡ もっとペロチューうううう♡ んぢゅっ……はむっ……んぢゅうう」

「っふあ……わ、わたひの舌がフェラされて……んひっ……ヲ、ヲタッキーいい♡ あ……愛してる愛してる愛してるっ♡ 愛してるっ♡ ペロチューで、愛してるうううううっ♡」





「んゝんゝ うううっ……んっ……んんん〜〜〜っ♡」

「おっほほほお♪ テレシアちゃん、チョー我慢してるじゃん♡ もう油断すればボクみたいに下品でキモイオホ声出ちゃいそうなんでしょお？ もう我慢しないで、本能剥き出しにして気持ちよくなればいいにいい♪ おゝ〜〜、やっべ♪ 我慢してるテレシアマンコ、きゅうきゅう締め付けて気持ちいい〜♪」

手本を示すように気持ち悪い声でテレシアの雌を味わうヲタッキーだが、それでもテレシアは必死の表情で声を押し殺し、首を横に振ってヲタッキーの誘惑を断る。

「あはっ、無駄な抵抗可愛いねえ、テレシアたん♪ でもお、1時間耐久ラブラブトロトロドスケベベロチューでイキまくって、もう頭は完全に低能エロバカスイッチ入ってるもんねえ♡ ほらほら、これは気持ちいい？」

ヲタッキーが嬉しそうに笑いながら腰を深く突き入れたところで、肉棒の先端でテレシアの最も奥をぐりぐりと円を描くようにして責めぬくと、テレシアは背を弓なりに反らせる。

「っあああ♡ そ、それっ……ダメだからっ……気持ち、いいっ……♡」

「どれくらい気持ちいいのお？ ほらっ、ほらっ♪」

「んああっ……あっ……ヤ、ヤバいくらい気持ちいいっ♡ チョー気持ちいいのっ♪」

ずっとヲタッキーとの行為に及んでいるテレシアは、すっかり語彙力が無くなり、代わりにヲタッキーに植え付けられた知能指数の低い言葉を自然に使ってしまっている。既にそれこそがテレシアの脳が性の快楽に狂っている証拠なのだが、ヲタッキーはさらにテレシアを追い詰めていく。

「じゃあ、今度は浅いところをチンポゴシゴシしたら、どうなるかなあ。そ〜れっ」

腰を一気に引くと、肉棒の亀頭がゴリゴリゴリと膣壁を擦りながら入り口付近まで動く。その刺激にテレシアは全身をビクンと反応させて、ヲタッキーの腰が小刻みに動いて、浅い部分をねちっこく責め始める。

「っおおお♡ そ、それマジでキくっ♡ オマンコにキくっ♡ 幸せオマンコっ、ヲタッキーのオチンポに惚れちゃうっ♡」

1か月前のテレシアであれば絶対に言わないであろう言葉を、表現を、今のテレシアは目を細めて嬉しそうに口叫ぶ。すると責められている膣が収縮して肉棒に絡みついていく。

「うほほほお♪ 今、きたねー野太い声が少し出たね♡ 自分でスケベ語連呼して興奮高めるテレシアたん、マジ好きっ♡ んゝ あゝ あゝ あゝ ～～～、テレシアスケベマンコが興奮して締めてくるっ♡ そろそろ堕ちろっ♡ オホ声出せっ♪」

「い、いやっ！ あっ、ああああ……オマンコ惚れさせようとしてくるラブラブチンポがガチ交尾してきてるっ♡ んあっ……あっ……む、無理っ……マジで無理っ……おおっ……♡」

再び激しいピストンを始めるヲタッキーの腰使いに、テレシアの声も切羽詰まったものへと変わっていく。女性らしい甲高い声ではなく、動物じみた低い声の喘ぎ声。それでもテレシアは快楽と理性のはざままで懸命にあらがい、赤い髪を振り乱す。

「最後っ♪ 最後だからさっ♪ 全部指輪のせいだからっ♪ これが終われば全部終わりだからっ♪ 最後に楽しもうよお♪ 最高に頭悪くて気持ちいいセックス♡ ラブラブ小作りっ♡ ガチハメ交尾♡ オホオホ種付け妊娠生ハメファック♡」

「んっ、んんんうっ……んんっ……」

ヲタッキーが妄想を煽り立てる下劣な言葉を掛ければ掛ける程、テレシアは強固に抵抗して声を噛み殺す。しかし容赦なくヲタッキーは下品で卑猥な言葉を掛け続けながら、腰を激しく打ちつけてテレシアの体を揺らす。

「んんゝっ……んんゝっ……んんほおおお♡」

やがてテレシアが限界を迎えて、遂にヲタッキーが望んだような野太い最低の喘ぎ声を



漏らし始める。

「んほおおおおおっ!? おっほおおおっ♡ んっほ……おっ、おおっ……おおおおお  
お～～んっ♡」

決壊したダムのように一度理性が崩れると、もう止まらなかった。懸命に表情を引き締めていたのが、だらしなく大口を開けながら舌を突き出して、ぐるんと白目を剥き始めていた。

「おっほおお♪ やっとオホ声出たぁ♡ すっげー下品でエロ過ぎだよ、テレシアたんっ♡」

そんな堕ちたテレシアの様子に興奮したヲタッキーは、更に怒張し大きく硬くなった肉棒を激しく突き動かす。

「んほおおおおおっ♡ き、決めたっ♪ もう最後だから楽しむっ♡ ヲタッキーとの、めっちゃ楽しくて気持ちいいセックス♡ ラブラブ子作り交尾、マジで楽しんじゃうっ♡」

「いいぞ、テレシアっ♡ ほら、ここヤッペーだろ? ここにチンポミルク注ぐぞ? ラブラブ成分たっぷり濃厚チンポ汁で、テレシアのマンコ幸せでトロトロにしてやるからな」

「おほおおおおおっ♡ や、ヤッペ……♪ そこ、マジでヤッペーからぁ♡ ヲタッキーだめっ♡ オマンコで愛しちゃうっ♡ 子宮で愛しちゃうっ♡ 気持ちいいいいっ♡ んっほおおおおおっ♡」

2人で野太い声を上げながら、2人とも身体を小刻みに震えさせる。もう何度も交わった2人は絶頂のタイミングを併せることなど容易なことだった。テレシアは顔を後ろに振り向けると、ヲタッキーは前のめりになって2人は舌を絡ませる。

「ん おっ おっ ♡ イググ……マジでイグっ♡ れろれろ……ヲタッキー好きっ♡ ちゅば……ふぐう……ヤッペ、イグっ♡ イグイグイグイグっ♡ んほおおおおおっ♡ いぐううううううっ♡」

「ちゅばちゅば……ちゅううう……ポ、ボクもイクっ♡ ラブラブマンコに生中出しキメちゃうっ♡ ちゅうう……れろれろれろ……ヤベヤベヤベっ♡ いくいくいくいくうううううっ♡ おっほおおおおおっ♡」

2人は舌を絡め合わせ、手を握り合い、同時に絶頂に昇りつめて果てる。ヲタッキーは宣言通りテレシアの最も深いところで灼熱の濃厚な種を吐き出し、テレシアは雌肉でそれを一滴でも多く吸い出そうと絡みつき吸い付く。

「れろれろれろ……ほ、惚れたっ♡ 今のでオマンコ完全にヲタッキーの惚れたっ♡ んっほお……♡ オホ声、マジで止まんないっ♡ んほっ♪ おほおおおっ……も、もっと幸せ

セックスしたい♡ 最後のお楽しみラブハメ交尾、もっとしてえ♡

「ちゅばっ……ちゅっ♡ 勿論だよお、テレシアたん。最後の夜、朝まで中出しキメまくってボクから離れられなくしてやるっ♡ ボクのチンポでテレシアたんの脳みそ、完全にチンポマンコ脳にするからなっ♡ れろれろれろ、ぶちゅうううっ♡」

射精を続けながら、濃厚に舌を絡め続けるヲタッキー。テレシアの中の肉棒は精を吐き出し続けているにも関わらず、萎える様子など微塵にも見せない。

結局、その後は獣のようなセックスを一晩中続けて、テレシアは人の世とは思えないほどの雌の快樂と幸せに溺れつつける時間を過ごすこととなるのだった。

そしてさすがにテレシアが力尽きて意識を失った後、幸せそうに安らかな寝息を立てるテレシアを見てヲタッキーはほくそ笑みながらつぶやくのだった。

「さ～て、ドスケベエロチンポ中毒にさせられちゃったテレシアたんは、愛する愛するヴァイルヘルム君を選べるかなあ♪」

そして訪れる約束の期限の日。

テレシアが出した答えとは――

本編終盤パート及びおまけに続く

※おまけのおまけ (AI イラスト失敗作)

